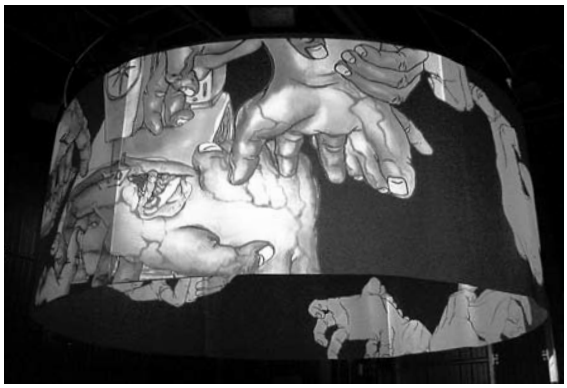
束芋
たばいも
アーティスト

# たちはだかるもの

@Kyoto



束芋「ギニョる」2005
撮影：Ufer! Art Documentary　©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

左の作品は次の展覧会で展示されます。
「GOTH ゴス展」
会期：2007年12月22日（土）～'08年3月26日（水）
会場：横浜美術館

海外で展示をする際、問題となってくるのは、いわゆる〝言葉の壁〟だ。しかし、本当のところ問題なのは言葉の違いというような単純なものではなく、考え方や習慣の違いというような根の深いものだ。考え方や習慣はその国の〝言葉〟の成り立ちに大きく反映し、それらを集約させ記号化したものが言葉、文章となっていく。相互の考え方や習慣にずれがあるため、こちらの状況や方向性を思うように伝えられないという状態が「〝言葉の壁〟がたちはだかった状態」と言えるだろう。

私の制作過程において展示設営は、最も多くの人が関わる重要な期間で、ここで失敗すると、1年を費やして制作してきたものが意味をなさなくなることもある。設営以外は、2～3人でやることばかりなので、私の思い通り、またはそれ以上の結果が得られ心労も少ないが、人数が増えてくるとそうもいかない。細部にこだわらなくてはいけないとても重要な選択がたくさんあるからこそ、たわいのない会話や日常生活では問題にならないような少しのずれが、設営時には何倍にも膨らんで大きな問題に発展してしまう。

そんなときに初めて、言葉の奥にある、違う国のそれぞれの考え方が見えてきて、設営を成功させるためにはその隔たりに対する理解や敬意がとても重要になってくる。理解や敬意を育むためには、ぶつかることもあるし、部分的な妥協を強いられ、すべてをやめてしまいたくなることもある。自由な美術の世界でも、最終的にまったくの自由の中で制作を完成させることはまずあり得ない。

特に海外での発表の場合、「どんな場所でもベストな展示をする！」という熱い思いを作家につなぎ止めておくことはとても難しい。そんなとき必要なのは作家の気持ちを深く理解している通訳だ。この場合の通訳とは、その作家の思いや考え方を唯一無二の言語として第三者に理解してもらえるように訳せる人間。そして、第三者が日本語ではない言語を話す場合は相互の違いを把握し、そして相手となるその個人の考え方や習慣を理解しようとしなくてはならない。

私にもそんな心強いスタッフがいる。彼らのサポートで私は〝言葉の壁〟を越えられ、やっと正確な状況を見ることができる。優秀なスタッフに恵まれている私が格闘しなくてはいけないのは、〝言葉の壁〟を越えた先にある〝たちはだかるもの〟だ。

いつも素晴らしい展示をする作家は、それぞれの場所の条件を把握し、必要とあらばコンセプトの部分まで再構築する用意がある人だろう。まずは各国によって変化する〝言葉の壁〟の高さを経験によって一つ一つ把握していこう。その先の〝たちはだかるもの〟には激突したとしても、怪我を治すだけの治癒力があれば、続けていける。